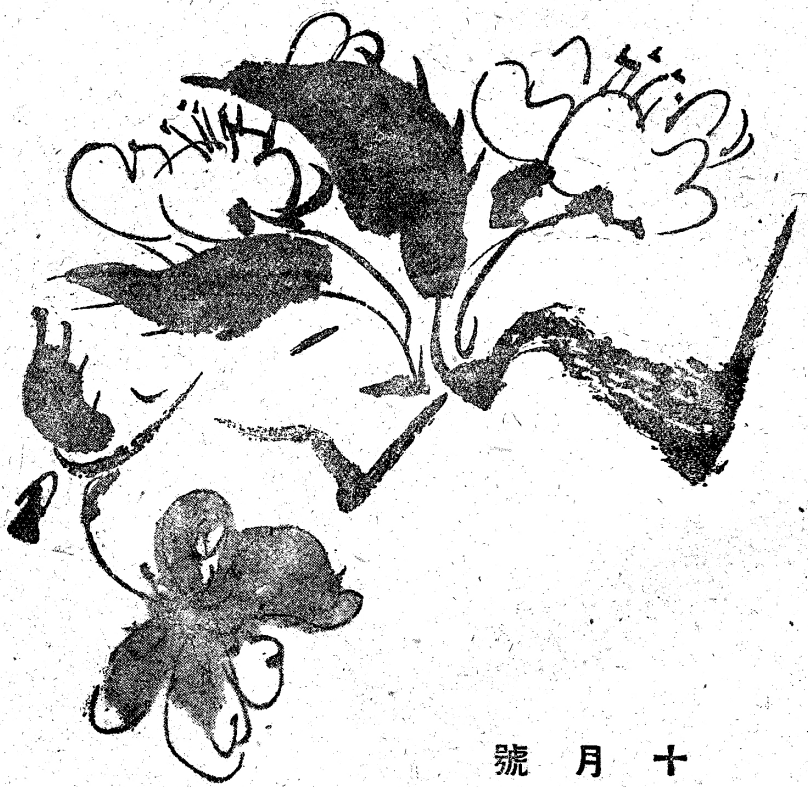


第一卷 第十二號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和二十年十月一日發行

昭和二十年九月廿五日印刷本

新句月本



十月號

俳句日本作品

うなぎをたべるうしろ夏山低く

細谷不句

龜が土間が大きく人たち蟬鳴いた

まつすぐトマト畑に入りもの啄むめんどり

幼い蟬とんで來家のうち天窓大きい

李貰うてかへる娘がひとり迎へる

神洲不滅山あり山の草露いつばい

ありがたし藍の朝顔咲き糸を繰る朝々

國難さあれ秋立つ糸車を淨め

鮪の魚閃き交る網黒く揚ぐる舷

黄いろ蝶々飛ぶ浮草夏果てし色に

やけあとあかきホストがふゆのなみ

涙しほからいこと言ふてこんなげなしおじまひ

雪とける風の海につかりて能登の雪

梅しらみかけてぬれてよあけたところ

たんばばばだらゆきの月の出

眼鏡通して字がはつきり讀んでると窓のそと港

春の陽春の芽吹いてる畠中よぎる

栗穂垂れてある映つてある小川をまたぎ子供と
曇りて冬の淺い川顔を洗つてある拜んである

安齋櫻碗子

高橋良太郎

原蝦煎子

けさ湖の波高い山には山の雪はれ
ビルに灯つけど淋しお濠の水寂し
眠れぬ夜の雨を敗戦の飛機も來ず

米倉勇美

一夜眠れず夜明けの雨を聴き風を聞き
夜明けの薄月の茫然視てある
肅然朝を視る眞夏の風が冷たい

稻垣一鳴

祭の夜のこほろぎ明日かへる母ときく
八阪神社裏の既に水うち藤の實
蟻團轉してゆく夕暮後追ひぬ

宇野彥籙

日曜日の午後の青葉のなかをきた弟妹であり
茄子一つをかきそれが夏の句になる朝
雲たくましく朝々つるの花實になつてゆく

松宮寒骨

つとめたらざりし手のひらをしみじみと一億のひとり私
嫁をもらひ裸でなる家の裏は山へみちがいつぼん
明るく渚つらなり歸かついでくる男

池田亞杜子

鴨ないてあさ寒風きて海苔そだ
冬山を夕靄を牛ひいて來るなとこ
火鉢の灰うつくしい龍安寺の春の夜
山清水をのむ少しはなれて春蘭の花
三月十日みんなと若くて雪ふり
三月雪で干菜をたべてしまつた
みんな雪とける園うち眞土
このとき據を出で東風にほひし

國ありがたく雪しろの流れ
 餘寒草のうへ黒い牡牛の歩き方
 こよなく身にふかし野の春泥ひかる
 球根芽立つ陽に子供来る足どり
 俯して水を蹴くすこし泛ぶ薄氷
 ふるさと積ふる日社の小徑つゞき
 雪の日このころおのづ積穀垣に添ひゆく
 お互に言ふことなく焦土に立ち外委着てゐる
 熟睡を得よう冬の夜子供と癡る壁際
 二月の海の風がこゝにくる格納庫の飛行機
 地に埋まつてゐる防火水槽あり雪が解けない
 雪道あるきし宿には宿の夕飯
 かるたとり三人となり三人もの言はず
 河が海に押さるゝ大冬となり
 スキーかついで行く雪の下杉苗
 家に風を入れ午後から出て雪割
 渡船までの雪積けぶの狭き水幅
 春雪軽しいま山畑に下りし山鳩
 春雪ありて鏡口へ高き一つの橋
 土筆探つて入れる手のついた籠の手を掲げ
 春寒散り鴨の池に降り満水
 木々のしげりの中にも松の木のしげりがゆく夏野
 けふ少し雨ふる路上にあそぶ子供がもちし青楓

山田宗作

九貫十中花

木内柳陀

蓬萊鶯郎

福島一思

女二人傘さしてゆく唐もろこし畑のしげりと橋と
 藤棚藤のしげりものを書くこの日
 防空壕の土と生えてゐる草と七月空の下
 千曲川鱷跳ねる音と覺ゆ霞まざ
 りんこの芽それはそれでよろしわれらの體臭
 春雲黑白葦哉の墓に見る黄昏
 春烈風再び郷を出づるの心
 蠶がすみ繩張の繩の影なし
 奈良は風なくて塔に秋の雲動いてゆく
 京の秋の日ぐれであり見ゆる東寺の塔であり
 石も水もおちばの金閣寺は落葉をかく
 銅像のない臺座が青空に咲き満ちてゐる花
 畢竟私は俳人で、銀河が探照燈が澄んでゐる
 夕日水田に映り墓地の影する
 風鈴 吊る風がある
 草に螢が、いきなしてゐる
 南瓜を作り南瓜が咲き蝶が来てゐる
 秋草に秋草さしそへて三七日となる
 少女たちたんぼ苺長にほほけたるにて
 青葉の、音の、卓球のはづんでゐる
 ふるき徑をゆき梅さく海も見ゆる
 雨ふつてあがつたばかりの赤い芽
 いちじくの青い實に日がさしてゐると

宮林益村

橋本淳一

小澤武二

財馬阿歩

山本木天齋

池原魚眠洞

海が荒れる音の島にのこしてある菊
うす雪になつて明けてある温泉へ橋
曇つてゐた日も見えなくなつて芒の綿の遠くにある海
今朝は汽車が出るといふ地霊のあとの茶の花の遺
降れば雪にきまつてゐるといふ雪がほんといふつてきて屋根の水槽
夏の雨ふる木が門のうち、そと 田中井夢
乗換へて夜が明けてゐる青田、大きな工場がある
水底藻草の青い舟をやる夏のてふてふ
炎天まへを通り島の郵便局の電信をうつ音
くにに母のもうゐない妻とゐるうちわ
雪をかむりし生垣のあなをさ日向になる
山の斜一面菜の花 教練す
シヤン／＼馬まつり馬上特攻遣兒承る
一握りの粉炭無駄なき松の花粉みち足る
ほがら、しと露のお盆豆ことのほか
ほがら笑つて大空の華ソソナこと夜の食膳
郭公炭俵の二俵は脊負へる子で
雖然と草花咲かせて住み少し草花を吹く風
夕餉さやか母を待つは二人子
さて更地の菟麻が枝張つた二百十日前
カンナ咲き母性の一すぢちほてさへたどしく
丸くて青くて大粒のいろも子供探りおとしたなりに
武者人形ヒカヒカ燈籠の灯が丸い食卓の園樂

佐藤鳴風子

電柱の時計がとまつてるぐるりの青葉が銀杏の樹
落日を送り家ぬちへ豆の蔓が伸びる
白菜育てよと言ひをみなをみなこころみたりけし
今朝征く人が静かに顔あらつてゐる
煙草にならぶ朝々の顔で挨拶する
汗し面ら土瓶口呑みのいくつ待つ
秋の山を前にひとり飯をたべてゐる
炎天 白い橋音たてて渡る
人の偽を真とまき子の牡丹梅雨の葉となる
蝶の二つに蝶のくれば麥畑
何にか堪えん靴の泥の乾きて秋(八月十六日)
死體をうづむる勤勞の僧と春の地の草
日 夜の、霞の音か
月夜のポストの影、人の影、そこに近より
桑にはさみを入れる音の夜あけてゐる空
うちの竹が隣へ笛を出してゐて隣の子供
また一人死んだので逢ふて變りがない
背の兒に昔の山や川みせて泣かさず橋を行く
風の木の葉のやうな鴉がとほい堤の線
再び君が征くことあとのこと冬になる木の赤い實
島、胡麻も少し欲しい胡麻すこし蒔く程の、場所
すこし早い目にきて日のある青田盤のうちの白さも
供出の卵ひとつりにきて幼く去んでゆく

森 抱 葉
早 川 昇
佐藤 大峯
川口 三角洲
衣 浦 眞
加賀谷 灰人
伊藤 水穂
關口 比呂志
鈴木 梅宇人
手塚 一平
西垣 碧禪洞
松尾 敦三
伊藤 雪男
福岡 灰斗
濱口 彌十郎
窪田 耕兒
佐々木 石々
鈴木 靖郎
井上 充夫
池田 詩外樓
(三落庵句會)

蟻があるといふこゑもやがてひっそりして村の青柳
どこかを爆撃してゐるげはひがあさから青柿落ちてゐる

雲を出ると日のぬくとく枯桑畑の道

鈴木折嶺

つむと消える雪のふり枯木枯枝やんでゐる

曇ると川に消えずにある雪に雪となる

此の日子の五七日の梅がつぼみもつてゐる

夜間標識も暗く傘に雨が曇になつてきたやうな

近木黎々火

池であつて夜であつて月

月が見えてあかるくていつもある石

月をかほに空襲解除朝日をまつ

机より見えて石つき夜がつづく

大越吾亦紅

水を一荷島のひと一人通る

夫人歌をたしなみこの家いろづいてゐる櫻の葉

舟をうかべて水底の赤い雪のうへ

茶舗に腰かけて前山のみちりそめし木々

重も重も降る雪ひとのうしろになりて行く

冬夜いり豆たうべつ古事記を讀んでゐる

二階から刈田刈らぬ田は案山子に雨ふる

稲刈鎌さげて出びんがし霧のなかにある

松の木くらいばんくらい音は雨、冬

日に目にさむくなる夜は月が出て村のなか橋

木戸夢郎

風があつてぬくくつて猫柳
石の白離れくになつてゐたりしたままの葬ひの後先

土が重たいのも道普請の花の咲いてゐるのも

梨の花咲いてゐる盡しもりと土蔵が白い

道端萩が赤いので戦場の我子の事

煙草屋からはずつと盡過ぎの海が見えてゐて秋

月夜の柿が一つ柿の木のでつべん

ちゆんと雀石屋の石の寒むくくと夕べ曇りある

閑かさは墓地にきて途か東京の音がする、冬

近く、それから遠くの警報も鳴りやむと浪音寒月

飛機は波状來襲、雪は積つた雪の上に降る

晴れて雪に枯木のかげと雀の影が二三羽

戦は身近にせまる空の梅の花白し身邊

櫻は葉櫻に學校が兵舎となつてゐる

煤けて軒にある日ざしがまた桑の茂つてきた道

つばきの下を向いてゐる春の日遅い目がさしてゐる

にはとり鶏舎にぼうたんの花のさきをばり

紅梅、畑の土はたがやしてゐる

瀬浪立つてゐる見えて梅さいてゐる

爆音が飛機達のをしまふと年明けの鶏が古里

小川都影

青木菁華

井手逸郎

藤崎麥村

木にある大根の雀がちつて銃うつた少年
 春さきの郵便局で、お婆さんの巾着の長い眞田紐です
 運動場のせんせいもいもも裸でれんせい向日葵の花
 あられの音もミン踏む娘さんだちカラスの中
 お盆のことは心ばかりの夜業があつて月が出る
 聞いてきた通り聞かせて掃火があかるい
 管制してまろい灯火燧は四人ではいる
 先祖からの石臼を引いて戦時下の此の麥の粒々
 畑とし畑になつてゐる雨が春になる雨
 雪の遠山に日の當る二月海の青く此の日征く
 日の入り處も富士へ落ちる日の少しのびたうな夕餉の煙
 豆の芽には霜よけの笹毎朝きつい霜
 雪のせた屋根の星が出で春
 雪に月の出で枯木が月夜の道
 歌つては日暮れ、日暮れては行く
 二階から木にある柚子の海が雨
 自轉車でゆく春あさき小松原など道
 一群の枯れあしが集つてゐると日が落ちてゐる
 よく燃える火で又雪になりさうなほかむりする
 ぼんやり月が仕事終つた綿打機械
 騎馬の一隊が正月二日の霜どけてゐる道
 かんのぬくい日もあれば陽ざしの佛のりんこのつや
 街の冬がこぼ映畫館の繪看板と待遊塚の口

森 久樹男
 柳田流矢
 皆川蓼土
 内久根聖巳
 東松八洲雄
 佐藤康治
 佐伯美則
 渡邊燕兒
 瀧山重三
 山本木天夢
 武田桂
 櫻田悠子
 平松星童
 青應香
 里村正子
 澤木正

馬つれて父と娘と冬の山へゆく
 岩に雪松に三日月が小袖橋といふ橋
 夜は雪あかりのいで湯の入口やなぎ一ぼん
 乞食たべるものもちて正月風吹く方へ歩く
 ふる雪少しつもり柿の枝が月夜になる
 警報のあとのラヂオ音楽が寒月と雲
 銀行の扉はいつも灰色でことし二度目の雪
 木の芽うすみどりの星になる
 家に二兒あり寒空大いなるまるみを仰ぐ
 めい／＼仔犬を抱き子供達雪が来る空襪襟
 いくばく五錢十錢の紙幣ふましく凍夜
 道遠くつゞく凍てついて馬の脊
 小母さんが在宅呉須皿こよなき粽
 竹生島つばめの子札所觀音寶殿寺
 石榴の花の全くあきらかに咲きし炒り飯硬い
 粽抹茶茶碗樂であきらかに雲染めて
 子供田を掻く一匹の馬は遠く草をはみ
 虎杖の莖の皮をむくか土間にひとりと
 林くふ馬貨車に並び吹いてくる青田の風
 荷馬車ゆく仔馬ばあどからついてゆく花のアカシヤ
 飯まへの爐に煖火ありて晩霜の朝
 泥田泥ふかく伊賀の子田蝶で育つ
 田が植はり田に水を張りお多賀へ詣る

佐藤専子
 鹽崎寸南夫
 岡田琅玕
 名雪理輝
 木庭晴龍子
 日向野秀榮
 岡野宵火
 蘆立陶抄子
 根岸榮一郎
 西山刀耕
 今川溪花
 松宮磨研

をんな田に苗をまくばる山しだいに曇る
鶯が啼く木の向ふにも木々ある朝
風雨となる麥あをい中の家をいづ
枸杞芽ぶく夕日の海の波寄する
霧が押しして來る道のうへ杏の花ちり
宿に着き一寸よこになるその疊の匂夏の日
大き松立つところ萱を負ふて春日に居る人
夕べ春暖車行東へ戻る空ひろく
こはましろき餅を水甕に持つ家の一人の媪
爐によればものを着せかけてくたさる後るより
冬その夜子と額を集め讀むもの
道をゆくゆくべくして行く霜解け
爐に楯を焚く祖先よりの敷物の毛皮
砂にうづもれ氣味の麥畑あげびげり
摘みつゝ芹のどろを拂ひある人
向ふむきしやがみ進む芹つむなづなつむ
垣根こばれたそのまゝ椿紅い花
兒の顔ちいさく畦みちくる雪消えず
畦草焼かむ日を日を風きてけふ
やしきうちあるくよるこばし露の臺立ち
朝の報道をばりてわが立つまだ咲かぬ梅の木
うすあかき楓の芽と夫人と日射のなかに
殘雪をふみ或は據を覗いてゆくことも

山原 微風

今井 六石

中原 我樂

堀川 屈人

清水 月丹

淺野 麗木

けやき芽ぐみあかつきの疾風の空ひろし
手を觸れたく草の花に踊まんとするほく
時が來て柱時計が鳴るちりこむ雪のこのところ
長女遠く勉學に行くきもち屋根の雪に日のさす
松の木の雪時にずり落ちる雪のことを言ふ
妻には妻の決意あり山の容を雪ふり
飛驒いつたい雪の白さこの國人ら深香を離さず
ほうざし一尾をていれいに食ひ灯の下
夫婦餅をついてゐる竹藪青い家
雪朝鋸を大切にもち電車に乗り來し男
大空とゆく氣持連翹の花をさげて乙女
早春こゝの松林折々松笠拾ふ人の來て
機跡の金庫のかたむき機跡を掘るいちめん霜
電車の切符のやうな紙幣で切符買ふ窓口も冬
舗道のすぐ消えてしまふ雪を學校へゆく子行く
地圖のここから西の方道の松の木にある白い富士
小さい火鉢の火と先生日が照つてくる時刻になる
鯉およぐあり流るゝ夏朝の水あさく
麥を刈り束ね農夫に肌に入る風あり
茄子苗を植ゑる土くろくて柔かきを手揉み
幼な兒まだ眠つてをり庭の目立たないところ芍薬咲けり
麥の穂立ち 勵みて 低き家々

鈴木 あつみ

高橋 晚甘

伊東 俊二

南 晴星

伊吹けふ夏の山巒を見せばつきり夏の山巒を見せる

若林 乙吉

水嵩の谷川を越えるうすくらきに虎杖花さき
 男並びて榛を掘る春さきからつ風
 原野傾斜を上る高きに峰あり低きに峰あり
 工場道の上であり皆と冬の道正しく行く
 兵隊襟章はつきりと冬日の二三人で来る
 風がまた出て五日ごろの月のある枝
 冬の明るい星一つまつずに工員として戻る
 山を青い柿の實の落ちてある路へ登る
 木があかるくなればあめ物やみしわらや
 君が征つてある夜もろこしの葉の月光びしよぬれ
 夏来る大きな山々にちにし耐乏のくらし
 村も決戦のとうくと村をめぐる水の勢ひ
 疎開工場動く日も近み桑のみのる頃の朝山
 ぢやがいつも掘り起す陽入る方のささやくもの
 梅の實地へ落したまゝ朝餉につく手を洗ふ
 数帳一隅をばづし草が高い見ゆ室の一方
 くちなしの花我は寺を寺の朝を好む
 空に銀河あり我先んじて子供草をわける
 残暑雲動かず家婦は縫物に伏して哭す
 けさ松の葉を掃きけふ大詔下ることを知り
 幼く裸にて正坐、今はただ次の世の子を願み
 日は無くて明るくて草取つてある此の時
 星それぞれ秋の座にあり戦終り

秋山秋紅蓼

内田南卿

喜谷六花

荻原井泉水

天の川原は越ゆる飛ぶ機は今宵より無く
 草青く道端に石あり石に言ひたい明り
 螢を見てれむる夜の、一つの枕
 友たちと逢へば藤の實の太き垂れてうごかず
 上馬引漣といふ蓬が長けしけふの太陽
 堪へておほばこの草を見る青い穂
 海の祭によんだ子家にぬす永いひるかを蟬の鳴く
 白い木槿を折る風の吹ききぬ秋の寺の人
 兄の兵大きな荷物弟がもちて家の芋畑なる
 秋夜この二盃が利く蜻蛉が灯に來たる
 南方の夢を思ひ朝はやい花へ南瓜媒助する

西垣卍禪子

中塚一碧樓

鎌倉雜記

荻原井泉水

飛行機雲といふものも美しい。これは前時代の人が全く知らなかつた
 雲の美しさである。機から落ちてくる傳單は春の空の浮雲と異らない。
 白くほつかりと一かたまりづゝ空に浮き出される。それが靜かに、だん
 々と擴がるやうに薄れてゆく。かういふ自然の雲がよくある。さうし
 て遂に消えてしまふのである。それが何百萬枚かの紙片であり、その一
 枚々々が「流」れる「言」葉であり、「蜚」ぶ「語」句であることを思ふと、い
 はゆる「流言蜚語」の源こゝにありと、そゝろに苦笑を感ぜしめる。

○或夜の詩

空襲のサイレンは青い水のやうな
深夜の空気に鳴りわたつた。

月はちやうど満月、
まさに天心にある。

私たちは防空服装をして、

家の外におり立つた。

雲をあざむくほどに明るくて、

雲一つ無い、星一つ無い。

と、銀の蜻蛉よりも小さい點々、

たしかに飛機、一機、一機しづかに流れてゆく。

あまり高空である爲めか、高射砲は打たない、

二條のサアチライトがじり／＼と見送つてゐる。

私たちは、萬全の用意を了へた、

いつ空の花火が落ちてきてもよろしい。

海一は螢火のやうなラヂオの前で、

次の情報に耳をすましてゐる。

不二子は軒先にある兎の箱の前で、

兎に草をやつてゐるらしい。

見ると、兎は月に浮かれて起きてゐる、

月の光にぬれた青草があくまでも青いのだ。

x

層雲壇の選をしてゐると、病床にある作者の多いことが解る。各地の
傷痍軍人療養所からの投稿も少くないが、病氣の人の大半は胸を病んで

ゐるのかと思はれる人である。さういふ人達には、俳句といふものが、如何に慰安となり、精神的の醫藥となつてゐるかといふことも考へられる。此の意味では、作句の指導をするといふことは、一種の醫師的の仕事であるといふことも云へよう。とにかく、俳句の選といふものは、おろそかに出来ないことである。病床から寄せられた句稿を見てゐると、戦争の句が割合に多いことに氣がつく。それも、戦局のラヂオを聞くとか、出征の友人を思ふとか、云ふ風なものより、もつと激越なる、いはゞ「、、、、、、」、肩をそびやかして上げてゐるといふ風な作がかなり澤山ある。、、、、、、、病入としてあまりに勇ましくすぎるやうな感じもする。、、、、、、、これはどういふ譯だらうかと考へさせられる。一つは、自分の身體が國のお役に立たないといふもどかしさから、意氣だけが人一倍に昂進してゐるのではないか、といふ事だ。も一つは、其人の體に病的の熱があるやうに、其人の心にも病的の熱があるのではないか、といふ事である。一體「、、、、、、」、徒らに大言壯語して、、、、、、、力みかへつてゐることが實質的にはどれほど戦争遂行に寄與してゐるかといふことも反省してよろしいのではないか。神州不滅、神風必來の信念を堅持してゐるといふ主觀は、其が幾分でも客觀的に貢獻するものが無ければ、甚だ空疎なお題目に終るといふことも反省すべきではないか、と思はれる。私が病床にある人の句から、此事を感じたことは、俳句といふものは、自分の心と體とのありやうから、上ずつてはいけないといふ事である。なほ其から引出されて、も一つ感じられることは、一億國民が今こそ、しつかりと大地を踏んで立つべきであればこそ、誰も氣持が自分の職場より上ず

つてはいけないといふ事だ、徒らに興奮したり、どなり立てたりするのは、却つて眞に此際をのく、が爲すべきことを見失はせるものではないかといふ事である。

此事は、然し、誤解され易いことだからなほ言葉を補はねばなるまい。嘗て、最初に戦争俳句といふものは、前線の作品であつた。次に、それは銃後國民の戦争生活意識を盛るものともなつた。其次に、それは戰意に油をそゞぐ役割をする目的をもつものともなつた。——こゝまでは當然の推移である——だが、其次には、斯様に戦争的の俳句を作つてゐることを以て愛國的だといふ自己満足をもち、他に向つて喚くことが主になつて、自己の魂に向つての内省を忘れる傾きになる。これでは、興奮であつて、眞の奮激ではない。頭熱であつて、眞の熱情ではない。俳句は叫びである。私は嘗て、かう書いたこともある。然り、叫びであることはいふ。だが、サエスチユアであつてはならない。

x

此のころ、エムミツチエルの『風と共に去りぬ』を讀んでゐる。これはアメリカで發賣と間もなく二百五十萬部を賣つたといふ著名な小説だが、私はつひ手にしないでゐた。福永泰助君が來訪されて、其本は戦争といふものに就て、大さう示唆に富んでゐる、との談に、私は久米正雄君の藏書を借り出してきて讀んだ。なるほど面白い本だ、或る意味では「ため」になる本だ。此の小説の背景になつてゐるのはアメリカの南北戦争である。南軍の歸還兵士が途中の民家に立寄るのを、マミーといふ黒人がいたはりながらの言葉——

「南軍の中になら一人だつて満足な腹をもつてゐる者はねえだよ」とつぶやきながら、マミーは此病氣には一番好く效くといふ黒莓の根の苦い

煎薬を汗だくになつて火にかけてゐた。そして「旦那方がやられたのはヤンキイの奴等のせいぢやねえだよ、旦那の腹下しですだよ、腹下しにやどんな方もかなひつこねえだ」と云つた。

最近、東京や鎌倉では、主要食の配給に大豆が過半を占めてゐるので、誰も腹をこはしてゐる。何といつても戦争に一番大事なもの「腹」ではないか。たゞ頑張る頑張るといつて通せることではない。何とか対策が緊要ではないかと思ふ。

x

同じ本の中に、アシユレといふ智識人の言葉として——
「結局、一つの文明が崩壊した場合に起ることが、こゝに起つてゐるのです、頭脳と勇氣のある者だけが是に打勝ち、その無い者はふるひ落されるのです。とにかく餘り愉快なことではないかも知れないが、たしかは興味のあることですよ。「神々の黄昏」(ゲツテルゲンメルング)を目撃出来るのはね……神々の黄昏です、不幸にも我々南部諸州の人達は自分を神々と考へてゐたのです。」

アメリカの神々と日本の神々ととは勿論違ふ。だが、私達ほど又、「神」といふことを餘りにも身近かに考へる國民はない。自分の兄弟肉親は「神」として征つてゐる。さうして神は絶対のものだと信じてゐる。此の信念は日本人として尊い。だが、あまりにもたやすく、神を親類扱ひすることは正しい意味での神性といふことを考へ誤らしめはしないか。今日の戦争は「神」と「人間」との戦争ではない。又、「人間」と「鬼畜」との戦争でもない。人間と人間との戦争だ、といふことは、はつきり腹に据ゑておかれはなるまい。餘りにもたやすく人間が「神」となり、さうして「神々の黄昏」を招くやうなことがあつてはならない。(七月二十八日)

苦吟推敲の時代

安齋櫻 碑子

正岡子規の仰臥漫録を讀むと、不治の病に呻く無垢な空想には、もはや健康な凡俗の我が儘や贅澤などは比較を絶したあざやかな現實感が胸を打つて来る。それは涙ぐみつゝ物を食ふより外に何の樂しみもないといふ慾望ではないと同時に、現實を超えた生命をたらすものであつて、生命と生命感とが益く一つになり、燦然たる永遠の瞬間に、どつしりと腰を据ゑたものであつた。それは單なる人情味とか圓滿さだとかいふやうなものではない。もつと烈しい頑固な野性的な、そして又た直接的な純粹な肉感的な、餘計なものを捨て切つた神秘ともいふべきものである。

人生と文藝にとつて一番大切なものを守り抜いた美しさ……さういふ男性的決意と實力とは、明治文學に於ては子規と二葉亭四迷にのみ求められるが、しかも二葉亭は遂に一人の弟子も持たずに印度洋上に客死したが、子規はあの六尺の病牀に在つて、よく幾多の俊秀を擁し得たのである。此の事は宗教に救ひを望まうとしなかつた彼が、究極に於て宗教人のひとりたるを失はなかつたやうに、思想を肉體によつて明證し、明治時代思想家の最大なる群れに伍し得たのである。既成宗教に自ら悟れなかつた彼れが、悟不悟の歌を左千夫に送つたのは矛盾であらうか、若しこれを矛盾と呼ぶならば、人生とは矛盾以外の何物でもない。根本は矛盾にあるのではない。矛盾を徹底させるか徹底させないか、徹底させる事に誠實であるかないかにあるのである。

今や吾々日本人は、從來の甘い考へを一擲し、敢然更生して再建の進

路に直面しなければならぬ。大東亞戰は遂に敗北に終つた、その歴史的意義は眞に重大である。此の事は大東亞戰爭を完遂しようとして全力を擧げて來た吾々にとつて意外な事に相違ないが、然し極めて明確な御聖斷によつて、吾が國の基である國體の擁護も安心して然るべきで、此の際順逆を誤る事なく、將來の目的を再建する爲めに、厳しい苦難の道を進まなければならぬ。それは生命の戦慄と戦ひ瘡れて、尙ほやまぬ氣概の眞に孤獨な、而して悠々たる魂を以てした子規の生活にも等しいものがある。即ち堪へ難きを堪へ、忍び難きを忍びつゝ、平和の戰士としての雄叫びに、又た靈驗の籤によつて自分自身を焚き殺した不死鳥のやうに、その灰の中から新しい生命に蘇り、死んだ過去の自らの經驗を解剖して、其の現實を天下に發表し得る程の覺悟と實行とがなければならぬ。

以上の事は吾々作句人の作句上の心構にも必須に當て嵌めらるべき大切な問題である。即ち淺薄、昏迷、放慢、不節操、投げ槍等の慰安趣味の領域を越脱して、必然と自由と規律と調和とによつて、得心の行く迄はきりきりの所まで押し詰めて推敲し苦吟しつゞける事である。芭蕉は其の生涯を通じて俳諧を自己の唯一の表現機關として生きた人であつた事はいふまでもない。即ち彼は其の歡びも、悲しみも、惱みも苦しみも、樂しみも凡て俳諧のみを以て語つた。しかも芭蕉はあく迄其の誠を誠として最上に表現する爲めに鏤骨彫心の推敲と苦吟とを重ねた。吾々が彼の一句一句を讀む度に、何んでもない只事のやうな簡易さの表現と思ひつゝも、讀み返し、吟じ重れるに従つて、それは實に容易ならぬ苦吟推敲によつて篩はれて居る事に頭を下げるを得ないのである。即ち一句の自然は精到に自然のまゝに捕捉され、其の自然はそのまゝで作者の世界の象徴となつて居る。筆者は此の推敲と苦吟とに全身を打ち込んで居

る知己として、近代に於ては其の天才的推蔽者として一碧樓氏を、又第一段第二段第三段と苦吟の光輝を増して行く習慣の人として六花僧を推奨する。

甘い句を作つて竟に安閑として居る事が出来ない此の心持は、堪へ難きを堪へ、忍び難きを忍ぶこれからの吾々日本人の眞姿に徹底する態度と少しも變りはない。吾々の生活様式や對社會觀念やが、それを生活上にもたらされたものと、表現されべきものと異なるを精到に辨別し、其の間隔を意識するや否や、更に深く實行し表現されべきもの、中へ這入つて行き、それを明確に把握し、其處から又又表現し實行されたものへ歸つて来て、それを根本的に鍛練し直さなければならぬ。表現されべきものと表現されたものとを比較し點檢して、表現されたものを更に深切に表現されべきものに近づけるといふ事は、鋭敏で細緻で慎重な理智の力、即ち澄みきつた批評眼が同時に作用するのでない限り到底不可能の事である。

吾々は其の爲には、第一に實行し表現されべきもの、内容を精到に確實に測定する事を必要とする。第二に表現し實行されべきもの、誠の本性と、表現すべきもの、本性とを傷けないやうに、第二義的に墜ち入り易い推蔽の仕事を、常に正しい道の上に在るやうに不斷に監視する事を必要とする。是れだけの精神活動が同時に作用しない限り、彫琢推蔽は實行に勇氣を缺くか、或は實行性を殺して仕舞ふ。従つて眞正の推蔽や苦吟や可能にするものは、眞正の批評眼であり、然かも其の眞正の批評眼たらしむるものは、對象から離れて、それをあらゆる角度から丁寧に眺める事の出来る心の餘裕であり、態度の自由である。

吾々が一つの感情の渦巻の中に捲き込まれて、竟に其處から脱する事の出来ない場合に限り、眞正な批評眼といふものはなく、あらゆる方面

からそれを丁寧に檢討する心の自由を奪はれる。病臥に終始した子規の傳さは、此の病苦の爲めに決して心の自由を奪はれなかつた處にある。若し普通の人間であつたら、病苦の爲めに實行し表現されるべきものが、果してどの程度に行はれて然るべきかを比較商量する力を失ひ、更らに表現されべきもの、中に深入りして行かうにも、對象が十分に捕捉されない限り、竟に堂々巡りをして一步も先きへ進む事が出来ない。子規の場合には病苦そのものこそ、反つて一層態度の自由と精神の餘裕とをもたらし得た心の逞しさがあつたと言へるのである。即ちいかなる場合にも自分を取り失ふ事のない、物に役せられない澤庵禪師の言葉借りて言へば、心を何處へもやらないで心を遊ばせて置く處から来て居るのである。

勿論この事は喜怒哀樂に動かされないとはいふ事を意味するものではない。人間である限り、ふだんの生活をやめて出家し修業しようとするのではない限り、喜怒哀樂に動かされる事は當然である。たゞ心の自由を持つ人は喜怒哀樂に動かされても、それに支配される事がなく、従つてそれに煩はけられる事がなく、直ちに立ち直つて平常心を取り戻して、喜怒哀樂する自分自身を見下ろす事が出来る。斯く言へば心の自由を持つ人間は、絶えず逃げ腰になつて、腰を浮かしたまゝで體驗を受け取るやうにも想像されるかも知れない。然し宙腰の體驗は必らず半分餘處へ心をやつて居る仕事の如く、完全な仕事の部類に這入らぬと等しく眞の體驗とは言はれない。眞に心の自由を持つ人はその體驗を自分自身の上に直接にしつかりと受け取り、それと同時にそれに對する責任と工夫とに心を向ける餘裕がある。従つて其の人はいかなる重責の體驗が覆ひかぶさつても、決してそれに壓し潰される事なく、どんな感情の渦巻に遭遇しても、其の中に立ち上つてそれを自分のものとし、さうして其處から脱却

する道を見出す。しかも其の人は容易く平常心を取り戻す事を得る爲めに、いかなる體驗の渦中に在つても、猶ほ且つ自分を自分から突き放して眺める事も可能である。同時にこの體驗は自分の長所と短所とにどういふ關係を持つものであるか、又た此の體驗は自分の生活に於いていかなる位置を保つべきものであるかの見互りをつける事も可能である。そして假令其の體驗が偶然なものに過ぎなかつても、それを自分に取つて必然なものとして、それを足がかりにして更らに高處へと登つて行く。しかも今日以後の日本人の一人一人が、此の心構によつて、いよゝ白熱化するべき時代を迎へて、心の餘裕と態度の自由とを保つ爲には、従来の數倍數十倍の心の逞しさが必要とされるに違ひはない。

但し此の事は吾ふに易く行ふに難い大問題であるが、吾々は何んとしても、此の心の逞しきによつて自分の體驗内容を形づくる、あらゆる要素を精到明確に把握し、把握したものの意味を知り、それを生活表現との關係に於いて眺める時、其處にどういふ評價が招來されるかを認識し判断し、其の認識と判断とに向けて、體驗内容を形づくる一切の要素を凝集させて行かなければならない。即ち吾々の今日以後の生活表現や作句表現やが、文學として高い評價を持つ爲めには、其の體驗の一つ一つが具體的に順序正しく整然と描き出されると共に、其の體驗の一つ一つが作者の正しき推敲によつて貫かれ、相集つて新しき作句界の大殿堂を構成して行かなければならない。

以上切見地に立脚して、吾々は單に對象を寫し取るといふペンを持つて句を作るといふやうな、安價な作句態度から潔く離脱しなければならぬ。苦吟し推敲し、而して何が取り返しのつかぬ程、刺き出しな一切の潤色を切り捨てた眞實に慄へたもの、又た何處か東洋の高僧を想はせるやうなうぶで、しい和やかな温へたもの、ぶつきら棒で少し不機嫌な

表情でありながら、決して干涸びて居ない死の深淵を覗いて昏む事のない、決然とした人間性が躍動して居るものが生れて來なければならぬと思ふ。

俳句は死なす

米 倉 勇 美

聖斷は下つた。噫！昭和二十年八月十五日正午、ラジオは畏くも「四國宣言を受諾、萬世の太平を開かん」の悲痛な御放送を傳へた。

われら日本國民はこの嚴然たる歴史の一時に誰か腹の底から込み上げる嗚咽を禁じ得なかつた者があらう。併しこれは飽く迄も冷徹なる事實である。歴史はわれら日本國民に嘗て經驗しなかつた大試練を賦課した。たゞ、恐懼、われら民草は涙滂沱たる中に何んとお詫び申さぐべき言葉も無い次第である。

余りにも急激な變化、環境である。さぞかし祖先の、神々も正に慟哭し給ふらんと肅然たるを得ない。あゝ併し詔書は遂ひに下つたのである。われらば此際斷然男らしく敗戦の事實を直視し、大悟一番「死して生きる」の途、新しい日本の歴史創造を覺悟しなくてはならない。皇國興隆への新出發！われらば荆棘の道に敢然突進しなければならぬ。

われらば世界を見る、いや見せられる。併しそれと共に今こそ自身身の奥の奥を深省しておのれが劣つてゐる點を率直に認めると共に、われらの中に、歴史に流れてゐる神聖な力を、傳統をはつきりともう一

度省察し自覺しなければならぬ。「心構への一新」云は「われ」は生れ變ることによつて昔からの尊いものを護持し、顯現し、その「生れ變る」と云ふ新しい形の中に眞に尊い傳統を再現しなくてはならない。これが歴史の事實である。祖父から子へ、子から孫へ、私は十年前にこの血の流れを、「俳句と血」と云ふ言葉に依つて、傳統と形の變化と云ふことを力圖したことがある。祖父が庄屋で、父が農人で、子が商人であつて一向差し支へない。いやこの變化こそ却つて祖父を、父を、祖先を生かす道である。

俳句の傳統亦然り、長歌から和歌の上句へ、上句から連句へ、連句から俳諧へ、俳諧から俳句へ——そしてそれは當然に十七音形を突破し禪脱した。これがわれらの俳句、傳統を血を貫き流れた歴史の必然である。われらだけがつちり飽く迄も根強く傳統の力の上に、歴史の血の中にわれら自身の日本を視る、「俳句は死なず」とはこの謂ひ、われらの無窮の血を云ふのである。新しく甦れ變る事實こそがわれらの生成でなくてはならない。

われわれは今の歴史の余りにも儼然たる悲痛を肉體を以つて心奥に感ずる。しかし茲にこそわれらは歴史の尊さを、傳統の血の純潔をひしひしと感ぜざるを得ないのである。

この悲痛なる精神の美、そこにこそわれらは輝く歴史の、日本の古典を發見する。

再起さるべき祖國日本の姿は、この悲痛なる美——歴史を貫き負つた道義の上に立つ清く明るき神々の姿でなくてはならない。

俳句は、短詩は、われら日本民族が持つ特殊精神のつきつめた血であり、姿である。茲に私は死して尙ほ死なぬ甦生されたる日本再興の力を視る、血を視る、精神を視る、歴史を視る。

(二〇、八、二〇)

眞に心の糧としての俳句

——生産俳句に就いて——

西垣 中禪子

生産俳句とは産業員の勤勞觀から生れる俳句藝術の意味だと思ふ。生産人の意識を通じての俳句であり、正しい勤勞觀、それは皇國護持の精神から生れる俳句でなければならぬ。従つて、皇國精神を體現するところに生産俳句の本質はあり、かくの俳句道は、今後も實踐理念として強調したい所である。

今、かつての生産俳句の在り方と、會社側からみた俳句會とに就いて反省してみたいと思ふ。

生産俳句は工場の中に生れる眞の詩情でなければならぬ、とか、句の中に生産のいのちが躍動してゐなければならぬ、とかと云はれてゐたが、實際に就いてみると、娛樂であり、とかく遊びごとに過ぎない感へ深くした。第一、工員が職場で働く時間を考へてみても、俳句を作る餘暇はないと云ふのが本當で、職場に餘暇があるとすれば、私用か食ひ物の心配にそれはつひやされ、俳句を作る心の餘暇は恐ろしくなかつたのである。彼らが熱風の中に流汗し作業するとき、心が俳句の思索に取られてゐたのでは、指の一本ぐらいはとばすかも知れない。又、たまの電休日に睡眠を取り、心の疲勞をいやす彼らの日常生活を思ふと、職場の餘暇にまで俳句を作れとは云へないものがあつた。會社側に就いてみても、作業時間中に俳句に魂をとらばれてゐたのでは、手だけは働かしてはるようが、能率の昂らないことは當然で、職場へ俳句などの持込

みは好ましい事ではなかつたかも知れない。

生産俳句がかような實情に置かれてゐた事は、勤勞者の生活に藝術などは必要でなく、俳句などは風流人のやる事だらうに輕視されてゐたからだと思ふ。つまり、生の欲求が文化價値の希求にあつて、文化は戰爭の建設的部面になうと、會社側も工員側もあまり直接的に感じてゐなかつたのである。それ故、生産俳句は娛樂の程度を一步も出てはゐなく、俳句の精神が正しい勤勞觀に内在し、作品は生命の顯現であり、勤勞觀からの美の實現である作品が、作家の生活希求であることを自覺してゐなかつたと云へる。

このことは、何に故娛樂が必要であるのかの起因を、會社側が見のがしてゐたことで、本質問題を現象的に取扱つてゐた結果である。されば、勤勞意識、勤勞精神の昂揚と云ふ指導精神が觀念的な空念佛に終始して、生産の根源が工員の衣食住確保にあると云ふ現實問題に目をおぼせてゐたのである。工員は工員なりに衣の欲求は美と聯關し、情操の問題へ進展する。食に就いては、腹がへつては入魂の仕事も出來がたい。又、遺隔の通關はこのほか身心を疲勞せしめる。これでは何んとしても生産人の心の裕りは出來よう筈がないし、心の裕りのないところ、詩想の湧出する根元はない。一口に云へば、勤勞は意欲的で生産することが楽しく、その俳句は單に娛樂に止まらずして、精神生活の實踐問題に迄徹底しなければ、職場藝術はうさばらしに終始して、向上はとうてい望まれないのである。生産俳句の道が正しき勤勞觀に立脚するは勿論、個人の意志の決斷により、職場と云ふ生活の中に行爲を通じて建設し、建設を通じて行爲する藝術の歴史的現實の「行」でなければならぬ。

されば藝術を建設とみる行爲の俳句は、職場から遊離せる風流俳句や、仙人俳句を當然無價値としようし、怒號を羅列し士氣昂揚とする所謂戰爭俳句は勿論目安ではない。眞に皇國護持の精神と實行方の發揮、訓練忍苦の下に堂々新建設に邁進する生産日本人の短詩文學が眼目である。かような生活俳句は、自己の生命の在り方、それは自己の生活する環境と關聯し、自己のある直接の場——工場、鑛山、家庭、街頭、田畑、山野、あらゆる所からそのまま新日本建設の俳句が生れることを作品を以つてしめす所に意義がある。俳句の用途が斷じて花鳥風流にあると觀念してはならない。否、逃避廢類的な俳句は斷然しめ出されなければならない。

かくして、機音の中での詩案が生産能率を低下せしめず、しかも、俳句を娛樂に止めてはならないとしたら、俳句することが明日の生産の根元となるような俳句會を作るより他にないのである。かゝる俳句會は、俳句する事に依つて一日の心身の疲れをいやし、新たな生産意欲をたくましくせしめる勤勞の原泉より生れ、作家の工員は衣食住の現實に對する高い心構が必要である。即ち、なにより心に時間の餘暇を興へること、必ずしも俳句第一主義ではなく、十分俳句の三昧境に專念し、心のアカを流し得る句會の開催が必要なのである。

この意味で、生産俳句會は工員の精神道場であり、俳句三昧は生活の欲求である。ある工場の出來事であつたが、月産目標率に二日の徹夜をしなければならぬ、眼瞼の餘暇を興へると云ふ條件で、ぶつ通し二日の徹夜作業を志願せしめた。すると、全學徒は血判して總蹶起した。めんくらつたのは先生で、血判はそんな時にやるものではないとしんみり

云ひ聞かせたとか——誠に笑へない話を知つてゐる。

かくの如く、心に時間の餘暇を興へると云ふ事は、勤勞者の生活に重大な問題をなげる。最早大平は開かれ、ひとり工場のみの問題とは限らないが、いかなる職域にあつても新日本の建設には、心のゆとりは皇國民の誇りをきづつけるものではない。樂しき時の樂しさは、眞の意味の樂しさを味はう事は出來ないが、苦しさの内に樂しさを知り得てこそ、まことの樂しさの味がわかる。かくの樂しさは、苦が樂の轉機を作るそのゆう念願的なものではない、建設と云ふ自己の意志の決斷によつて現實を開らく苦樂を超越せる境地であり、實踐の根源である。苦中にあるそのまゝが樂である眞に自覺の絶對境である。

かくて、勤勞の妙味はこの自覺の體現に求められ、生産俳句のみちはこの道以外にないのである。

指針を記す(九)

中一塚一碧樓

畦をあるいて來る 首卷が父 瀬尾一風子
 冬の日父のすがたと聖護院大根まるく
 父のあるいてゆく方冬の日山の山の中

三句とも父についての句であるが、あながち連作といふのではなく、一句一句獨立してゐる句である。第一句の「首卷が父」は如何にもハツキ

りと強く描かれてゐて愉快である。「首卷が父」といふ言葉など之れだけを離して見る場合は一寸妙な氣がするのであるが、此句のやう「畦をあるいて來る……」と云ふに續くと少しも變てはなく實に的確な、表現となつてゐる。こゝでも「言葉の微妙さ」「言葉」の不思議さといふやうなものが感じられるのである。

第二句聖護院大根の句。父の姿と、さうして聖護院大根のまるいかたちとを感じてゐる作者の心持は誠にあかるく、おのづから微笑を感じられる心境である。

むかしの人が「俳諧は取り合せなり」と云つてゐるが、此句必ずしも取り合せがいゝといふのではない。取り合せから云へば或ひは即き過ぎてゐるのかもと思はれるが、それよりは此一句の底に持つてゐる「おかしみ」「よき」「おかしみ」を觀るべきであらう。

第三句は又心瑣殊に澄み切つてゐる事が感じられる。歩いてゆく父をじつと見つめてゐる作者のもの靜かな情合が實にいゝと思ふ。表現から云ふと「あるいてゆく方」といふ「方」の柔か味が良く、また「冬の日」の中」といふ一見稚拙と思はれるほどの素直な言ひ方が丁度、好ましい調子を持つてゐる。

此の三句とも父に對する情が殊更でなく自然に泌み出てゐるやうである。句表現にも良き特色を持つてゐる此作者であり、これらの句々には稍作者の本調子が出たといふべきであらう。

寒うちかくまでの日ざし雪原 長谷川杉郎
 寂々こゝまでの境に到れば、もう古いも新しいもない、自然と共に俱

に靜かに暮らしてゐる人のこゝろ、人の姿が窺られる。

假に「本格の俳味」といふやうな事が云へるとすれば、此句など本格的なものといふのである。句境も句表現も共に堂々たる一句である。

梅の花咲く路に馬糞を拾ふ私と兒と 伊東 秋蘿

速急に「之は馬糞の一句」といふ事勿れである。自分と子供とでせつせと馬糞を拾つてゐる事に相違はないのであるが、此作者はこの時しも「梅の花咲く」と心に感じてゐるのである。詩情といふか、このこゝろを饒達は何時の時でも、どここの場所でも失ひたくないものである。

馬糞を拾ふ事の句を梅の花で詩化してあるとも云はれるかもしれないが、さうした風に詮索を受ける事は、僕は少々不服であり、句の持つこゝろ、句の持つ情を、ずつと其儘に受入れて欲しく、其のまゝに受入れる其儘までで結構であると云ひたいのである。自分の句を評される場合によく右のやうな評言を耳にするので、つひ此句について附言した事である。

米張りつめてし河のひとこゝろ河水 吉岡 南 呂

どこまでも地味な作者の心持が確かな手法で現はされてゐる。ずつと一杯に米が張りつめてゐる河で、ひよいと其一個所に水を見つけた此作

者の軽い驚き、深いよこび、それを観る可きである。

之は自然の象にも、又人の世の形にもかく出て来る床しい風情と云ふべきで、好ましい句こゝろである。

水音してあるさまはみまきぎの萩のきれいな 照井 稗 人

御陵の水の音、御陵の萩の花、まことに心しづまり襟を正しうする心持である。水の音もいふ萩の花もいふ、更に「萩のきれいな」と云ふウナ心、ウナ言ひ方は此場合大いによろしく、かうした行き方に賛成である。

「水音してあるさまは」といふ所、殊に「ままは」の「は」など一寸面倒を感じるが、よく読んでみるとそれほどの障りでもないやうである。

寒朝行きに行く緒土道の強いあしあと 松浦 佳 代

素朴であり、氣持の張つた一句である。この場合の「緒土道」は實に確かな思ひであり、一句が生き／＼としてゐる。

「行きに行く」と云ひ、「強いあしあと」といふ所など決して巧い表現とは云へぬのであるが、一句全體として可成り一本に來る勢を持つてゐる。句の面ばかりが綺麗に巧みに出來上つても、どうも打つて來る力が弱いといふやうな句に比べて、かうした句の方がどれほど快いが知れない。この句勢に與する。

選句録

井泉水選

瀧山重三

みぢへ旗を、旗日の二三軒はあまうみ夕べとなる
空襲解除、柚子の實柚子の木にある静かな夕日となる

みんな働く世が来てゐる空の高い高いところの鶯

自脈してなれば山茶花腸をなくしてゐる

外氣合は月の、雪やんでゐる海鳴りの音も

海、冬のかぜがふく月夜

言ふべき言葉なしあのやうに死ねたら、と思ふ

佛からさげたものに手をだしてゐる

雪の日の雪のやうならうそくのもえつくしさう

戻るときの暗に海が秋、てんめつする

柵の櫻ふさふさと葉に澤山さくらんぼの中の乳牛

土藏だけ残り土藏の中に住んでゐなさる、蝶々

町の裏が灯し日の昏れるまで泥鎗捕つてゐた男

傘さすほどでもなく枇杷の木の花とみればそれらしき白

花を供へ、小さな佛のふた親は揃うてゐて鐘たたく

燈がおまつりなので水邊の水 鷹立陶抄子

三好叢一路

淺井冠二

晝は桃の花が咲いてゐたこゝまで送つてもらひます

まだ夕明りの、そのような横顔に話してゐる

蝶々、リボンにして結び着物にしてきてゐる

星と星と冬の星座にならる

屠龍數機翼を休めたり雪の那須山朝

翼振つて著陸合圖風向旆寒風に揺るる

めつきり春めく山のかたる牛が出してあつてなく

丸大根こいで掘けてゆく寒の日さし

ちらんちんんと鶴鶴飛べば紀元節西日

暮れてしまつて春の星

牛がくる牛が鳴くつくしんぼ

ならんでゆけば春の鐘

よく燃える火で又雪になりそうなほかむりする

空へ海へ征かせて白い紅い棒が咲く

鯉のはれた音のしんもり夜の青葉

桑の花、それから東京へは出ずにゐる

ぬれておもしろい簀かべにかけて暗くなる

近い山から雪きえて遠い山の雪白し夏

燈火管制して蠶糞の匂ひする月の出てゐる道

枝にとまつて寒がつよい朝のからす

ガラス戸は閉めて見える荒れ模様の日ざしが屋根の煙筒

障子に日がさして室のなが明るくしてゐる冬

津田笹彦

佐藤専子

櫻田悠子

佐藤康治

雨の日も雲は明けておいたがよい病人で秋咲くころ

夜あけて白桃緋桃の薬家道きいてゆく 栃木よし雄

月ののぼつてくる春がひろびると滑走路へ誘導してゆく

あられすこしふらした春の夕べの空でこどもの防空頭巾

麥の秋が白い雲ふかく月のある沼のそばにある家

蟹の目にあかるい月夜が橋のしたの石ころ

正月雪のない日のみそささいあちにもこちにも

村が總出して雪道あけると酒飲んでどこへ行くや

ハザの上あがると涼しく二百十日の穂波一降

淡雪鈍研いである研きすまし

春の來る餓が山に木を伐る音

野を遠くはだかうまのゐる春日くれをはり

お手植の櫻も幾年の花のあとの葉にくる

替報、まひるしづかに種蒔く苗代蒔き終りたり

道が學校へまつすぐ麥の芽田があるときさながら

あらし、歡呼のあらしその中の一人の少女梅もつ

母を葬る喪主として借着することか

母を葬る特配の酒のめぼし酔ふことぞ

深く棲むひらめきを氷つてゐる

草の莖に川魚二三匹霧から降つてくる

雨だれ聲震の顔へかけた新開の下覺めてゐる

傘が二三本ひるほどは梅雨のげふは日の照り

飛機は遠いことラヂオが云うて青葉の鼻の聲

森田十雨

名雪理輝

佐藤龍

横關碧樓

こころ種どころの椿若葉の英靈かへります

五日ころの月が枝にまたも疎開の荷が通る

松嶺もきけて松山たきき拾ひにきてゐる

お山の雪が解ける水で椿が赤い夕陽の水車で

夜るの櫻に手拭しぼつてゐる

焼いたあとは雪が通る山のわらびのこぶし

朝月が冬も葉のある木、馬の爪そいでゐる

歸りの切符は持つてゐて川の流れを見てゐる春

しづかなあのおとふたりゐてふける夜がふゆ

かめばうすら甘く雨天の質の戀こころほかなし

映寫館から出て白い月夜の影となつて歸る

校門しづかに芽吹く櫻の樹があつてホスト

入隊通知が朝の机に靜かに咲く一りんざし

がいしにがいしより白い雪のつもる時間

雪が月になつた火の見やぐらにうごくひと

星が夏めく夜店のモナリザの微笑

雪のあとの何もかもまぶしいのを電線工夫が二人

想ひ出のホンホン時計が遠くでなると雪も夕鐘

岸の花は水の中に許されて歩いて歩く

川があると橋があつて昏れてくる

うちの櫻ひとと咲いたこと言ふて通つてゐる、朝

しづかな雨を白い薔薇の蕾が濡れてゐる

裏木戸が明いてゐて青い空とまだ雪がある島

植田市龍

木庭皓龍子

平松星

武田佳

朝日うらうらと花に立てて白いカンパネ
 曇つてすだれのすすけたまま夏となつてゐる
 雨はれた石ころに花びらがはりついてゐるユーモア
 人生も、石ころ道の暑い日の日かげとなつてゆく
 神さびとはみたらし静かに山吹咲いてゐて朝
 岩が透けて漕いで岩の藻が春
 辛夷が散ると蜜蜂が来ると二年生になつてゐる
 拜むに傘たたんで傘についてゐる花びら
 職災者の談も櫻が咲いて燃えてゐたと、車中
 船から見えて棒の下汲んでゐる
 飯場建設豫定地は雑木原の向うに、吹雪くばかり
 なんとなく春がくるよな夕陽が歎の音
 倒ひて老いた犬と、山がまるまる枯れてゐる
 山はまるまると枯れきつてゐる冬から春
 おだやかに暮れてくる冬の日が戦ひのさなか
 大地にひろげた地圃の四角の石、草には風
 闇を汽關車だけ通つてしまふとほたる
 焼けても朗らかな笑ひを工場長とかぼちやの花
 ある筈の月が雲の中残業の灯少しもれてゐる
 海邊の石垣ばらが盛りでほんぼん蒸気ほんぼん通る
 客に白い米炊いて落の藁ちよつと摘んでゐる
 春になつたばかりの立樹なる水田のおもて
 汽車のくる少し前驛長さんひとり出てゐて山が残雪

落窪京太郎

村田白鶴

金平二火

淨心寺 惇

小田島 義

山の中の村の馬方と馬と仕事に出かける朝早い梅
 旗日の旗とりいれてゐる藥局の主など日がひてゐる
 ぶと、硫黄燐寸の火となるまでの空虚 土野 忠三
 風見くるくる空襲となり解除となる生活の中で
 とんぶく五つばかり置いてゆく富山の藥屋さんで椿のさかり
 まずボンボン時計の動いてゐる太い柱に歸つてきた
 子も親も同じかすりのもんべのすつかりはざくら(靖國祭)
 曇り日一日暮れるときの荒海の岩の肌 佐藤逸仙子
 月夜が雲のうらにある工場のうしろの海がもう秋
 土瓶にさした花のけさはいつもより早い日がさしてゐる
 大きな落日とし静かな浪が港の口へ春がきてゐる
 窓がけさから雪のちらついてゐる分解圖一枚引き終り
 月のおちかけの鶏に鶏の和すいちめん雪(中支) 松本 計返花
 家郷遙拜みんな束にむいて幾山重なつてゐる冬
 暮れてゐると月がさしてゐるとトーチカの銃眼
 銃は手ばなさないで柳の芽日本からの茶をのみ
 みるみるつもる雪で月が抵抗線の影引いてゐる
 訪へば征かれたといふすもの花今年も咲いてゐる 平岡 國次郎
 乗せてくれてエンガン車、エンガンの音さして若葉を
 たつた三軒の山家と暹櫻と大井川流れてゐる
 山は若葉の、郵便屋さん白い蝶々に逢つたりする
 夕日に銀光らしてゐる麥はたけ空襲解除
 山でうちの生徒に遇ひわらひやせんまい山をくだる 松井 頑久

山の學校は老校長まい朝早くてうぐひす
あらしあとの朝日あらはにさして白いにはとり
機はちかし岩をかむ荒なみがあらはな冬
春に雲が出て影るとさむかつたりする白の籠の小鳥

栗栖ひろよし

そでくちさむきどてらのささなき藪中
千大根のしみよう、冬もをはりの雪か
雪のやんでゐる晝を硝子こじに
春はひるすぎの灰汁が濁つたりしてまつてゐる
晝休みの中庭の梅二三輪開いて見ゆ
墓に花霜とけける

高崎貞之

ゆたかに暮れてゆく啼いてゆく
月があつて月がかけりもする
花野とはこんな野を兵隊うたうてくる
砂濱麥の青く松の青く海のきこえる道
吹雪のあとの海がくろくて筏止の筏の雪
河原も晶青いもの雪のせて貨車を通る
ゆきはれてよりゆきあかり飛機をまつ
豆の芽には霜よけの笹毎朝きつい霜

東松八洲雄

青應香

もう薄暗い程な豆の花が風呂屋の横つちよ
南瓜の花このごろは勤に行かれる牧師さんで
しづかに雨ふるあやめ花の休日
故郷は梅がもりさいてその道この町の士族屋敷

日暮は野火も見える山の水のめばつめたし

増村辰郎

深雪に雨の音してゐる茶かまの口
雪捨ててゐる日は日ざしぬくとしひげにしらがも
雪に日の照れば直々と竹、今日祈年祭

岡田三不止

洗ひ場は家の前に月夜の壁が白く桐の木
満開の八重櫻のけふは村葬があるに來てゐる
さくら咲くけふは豆を豆腐にして貰ひにゆく
南が吹くと雪がよう消えます木を伐つてゐる
晝おきて青い柿が枝にあるもう一度あさの新開

本多閑麗

少年工も早春のあめ晴れてゐる造船所にて
星の出るころを戻りくれば椿の花かな
山よりも村へ朝日けさやかに此の大雪
母と子ともう風邪の直つた火鉢のみかん
雪のはれたおそい月が上り此の城山千年
子供このごろつくしがしに出てゐる朝々出勤
日が焼けおちるまで葱坊主職事の事思ひ思ひ戻る
雨蛙、寝つかせて上の子は遊びに出る

水谷青史

一すじの光りへ帆がゆく
とびが大きい輪を一つ描いて日の暮れ
すずめの碗豆畑のすみこで咲いてゐる
夜道に水の湧きこぼれてゐるところ信濃追分
卯二つと芹の根しろじろとそるへてある

高橋一洵

かつこう棺は林に埋めて戻る
林葉椰子

林葉椰子

少女青寫眞に寄る朝白いマスコ 日向野秀策
 岬のしらなみ墓のそば松の根を掘る
 窓に白蓮それを活けてゐて先生日直
 野草にあめのあとの陽がをそなつ 里井正子
 稻かりとつてからのあとのあをい芽であつたり富士の雪
 草の中池があると消える雪がふつてゐる
 きびしく冬の日のできるとき梅の枝いつばいつほみ 澤木正
 お醫者の俵が歸つていつても暮れずして青葉
 青梅おとす音が雨はれた夕日のかやの中(病中)
 雨が雪となつてゐるおもとの赤い實 高本三蔵
 雪のとけし水溝となりてそれよりも雪降りつづき
 味増こうじうまく出来ましたみそささえの鳴く日
 目がさせば梅の小枝の風ふけば風に散る雪 三輪 薫
 午後からはすこし雪とけてゐるりゆうのひげ
 花ぐもりの體験からのふとん背負ひてゆく
 犬がふりむいて行く雪解け樂する 藻谷草土史
 家根の雪ずり落ちさうななんれんに編みものしてゐる
 空に一日友軍機防空頭巾で麥踏みしてゐる
 雪が雨になつて降る萬年青の赤い實 川上湧泉
 雪も氷つた日の近みちを戻る
 浪音と市場の建物と明け易し
 夜もあがるく降りつむ雪にて庭のはたけ 宇佐美一步
 月夜をもどり灯をもらさないでゐる家の形、わが家

くもの巢のくもはいつともその位置にゐていちにち爆音
 雨が春となつて居る庭石の苔 阪部蝶三
 月を孕んで夜の底の雪の村 前田若水
 ゆきはれてよりゆきあかり飛機をまつ
 とんぼうびとくみふたくみ産卵にくると雨上つてゐる
 豚の仔抱きあげ百姓等大笑ひする木の芽どき 井上有紀男
 秋が晚方そとの籠がもえてゐる垣の中人の佳み
 山にも櫻咲いて郵便局の二階電話室 内久根聖己
 月の明るさが工員住宅と菜の花はたけ
 紫蘇の葉に風が戸口すこしあいてあつて涼しい
 きりのやうに降る梅雨にして伸びてゐる胡瓜のつる
 疎開の子がまれてゐるかっこう、津輕のかっこう 片岡樹裏人
 風が棘の青い葉に疎開の子とうちの子
 そんな話も聞くにはきいてゐた耳の大きなみんくそ
 月のありどのほのかなる枝のすがたが松の木
 冬刻る空の著しとも松のふぐり二つ三つ
 何處かに月がありさうな薺の白菊 中村五倍子
 冬ざれや以前はバスも通つてゐた驛標
 しづかさば松のしん五月雨の窓の暮れるばかり
 梅の實おちる音の暗い夜の石におちる 御井弓枝
 雨は五月の、レモンの花は薄紫な
 たんぼは咲いては咲いてはほほけそうして私の病は
 煙出しから煙が出だす日暮となる

けふは熱なくてめざしがうまい雪が雨になる

梶本戸城

雪どけ湯のわく音が晝近くなつとる

毎日養報毎日飛機そばの花まつ白

宵なから薪を下るして椿のはな

松に朝日、まいあき松根廻りが行く

まいにち爆音まいにち風ふいて枯木枯えだ

からつ風の奴風吊つてある店

淡雪、白湯のあたたかさを手手にもつ

月のくもを出るとき葉のない木かげをもつ

櫻さきかけて山の里にも床屋のあめんぼう

岩にふつかつて夏がくる浪がくる

梨畑梨の花小川流れてゐる

山の向ふも山の夕べの送電線が夏になる

とつぷりと暗く屋根が屋根に重なつて月になる

川原に人が夏の夕べ高いところ電車が通る

口答へをしかり静かに莢豌豆をむく

目には青葉、オルガン風のかげんできこゆる

石にふるさまをもう夏と思ふ

山にきた雨がここにもきこえる雨でてふてふ

切ない程の月夜でありベットの白さであり

池が氷ると来る鳥が来てゐてあるく

秋が来て紅葉してきてこちらの事御案じ下さいますな

今はんは廻覧板ですいいお月夜です

菅崎道雄

堀切春扇

土屋曙子

關根ふさ子

此頃落葉で沸くお湯の落葉のもゆる音で

枕邊野菊咲かせて看とる目の毎日晴れて

残燈燈がほつと明るくしたそこの櫻の花びら

わだちがつくほどの暖かさです牛車について歩きます

鶉があるので枝のあるボアラ天突體操

汽車の煙のとけてゆく空がちかく雨らしい温度

あふれるほどの水槽に來た馬と櫻の蓄

空の晴間としての紅葉の一枝

白百合と白雲と照りだして昭つてくる山

學校には櫻の冬木、校舎が授業してゐる

月も雪やんで竹の影白く雲のゆく

そんなものかんばんだけが正月寒い風ふく

竹の子竹になりすまし雨はれる川音つよし

病みては近く鳴くまた遠いかなかな

つゆあけちぎれさうな雲をゆく爆音

朝々夏がくる傷兵等五訓奉誦す

麥刈鎌とぐ傷兵あり夏雲白し

降つて積んで晴れて青空の薦のこゝろであり

みんな黙つてラサオの情報雪に雪降る

枯れ田と枯れ沼と山ふところの一軒

われら剣をいま花の咲き蝶が来てゐる

出て征つてから、ことしの部隊の蓮の花實となる

谷雨滴

森景諫郎

鹽田正吾

中西國友

菅無極

白いものでもちらつきさうな朝が雀のくれけ畫になる
梅雨少しは晴れて身を養つてゐる畑の草などを引いてゐる

近頃毎日のやうな爆音にこんばん蚊の多い蚊帳の中

訪れて涼しくお花の娘さん歸つたあとの水盤(香さん居)

みぞればた雪となる晝休み蜜柑のあまき 小島 胡市

一勝一敗は戦局の、寒空晴れてゐる

日々決戦、遠山夕映のからすが歸る

炎天歩く身の雲湧き上り晝にする

冬の日さしよればもうゐない人の机のしみ

活字拾ふてゐる窓の彈丸よけと赤い花の鉢

雨やんだ空地の雷よけの木と子供に星が出た

歩哨さんには蓮の辭かにゆれてゐる朝

田舎寺はお下りをかき餅にするなど正月五日

獨り豆をいり樂し今夜も雲になるらし

ふりさうでふらない雪空の藁打つ音が一日

話がそれから大きな掃をくべる

櫻さく日も汽船が白い蒸氣はくので寒い

海鳥、船もゆらりゆらりと浪が春です

しるすしるじろ干してある春

活字がゆれるさざ波をほんぼん船でゆく

朝は朝日に行き麥の穂の月夜を戻り

行くに遠くまで麥の穂月夜になる

灯の下で夏のもの姉妹で縫ふてゐる

吉村しをり

吉川 哲男

印南 健治

街にことしの燕が飛ぶ召されてゆく

もう家の前は植ゑ終つたかきつばた咲く

山羊鳴くと霧はれてくるとまくらんぼ色つきさうな朝

麥わら焼いてる匂ひ裸で飯にしてゐる

もう月が、私の鼻の長芋のつるをのげしてゐる

歸りは一人の麥のはたけで月夜になる

麥は、麥 笛の 鳴る 夕 燒 する

まんじゆしやげに雨ふる郵便屋さんごころうさん

かもめ水におりてはとびたつては風の中の軍艦旗

舊正月らしい門の赤い春聯と赤いきもの子供と夕日

なんにもないものの、番茶がうまい冬の夜のラヂオ

雪が解けると梅のつぼみも白く手紙かいてゐる

眠つたのかばら色のねんねあたたかく戻つてくる

春やせせらぎ 月 夜 の 音 遠く

なにに御無事で田舎は曇の暗溝排水です

あさあさ生徒なららびゆくあさあさの霜

蟬なきはじむる山は木を伐りはじむる

月の明るい手を洗ふ山の形山の木

子供が歸つた後の紫陽花の花など

燒原の夏になる陽が照りつめる

一機まだある壕の上の草風吹いてゐる

ラヂオがプザいな家々の防火用水月夜である

麥は刈り頃の、夕べを告げる郭公である

辻村追鳥子

鈴木單衣女

走内夜草

重村順孝

能智愛子

佐藤忠美

梅木成敏

矢島寒雄

多胡比左志

坂田義三

二羽、三羽神の鳩か日の出まへのおりてゐる
 踏切番はゑない月夜は片側家並の港へゆく道
 烈日の地平の果迄何もない歩哨に立つ
 軍靴ざくざくと黙つて歩いて歩いて月のない道
 かなかなかながな寝た子へはんぶん蚊帳は吊る
 月の雲をめぐり橋下はよく釣れます
 駆歩のリズムが松の並木のすくすくと朝の夏
 木目の波形の古い机潜水艦のことを學んでゐる
 畔のボケ咲く苗代の水がつめたい曇り
 苗代深水にしておそ櫻散つてくる
 たしかに敷うぐひすの警戒警報解除です
 たづねてくらく沈丁花の匂ひ家の横通る
 それは病人のきままとして聞いて花を活けて
 ひぐらしひとつ灯をともし瀧見茶屋を去る
 やつぱり家がいちばんよい青いからすうり
 佛の供物は日のあるうちに下げて冬の日
 月は枯草に枯草の風ふくにのぼり
 日時計が午を示し夏の白い天主公教會
 雪は雨だれになつてゐる藁打つてゐる
 朝鮮のうた歌うてゐる月夜海をまへ
 日がなくなつてから隣の木散つてゐる
 はるかにやまゆたかに秋
 くものあみがだんだん日のさして五月晴れ

長山林二

印南一司

鈴木裸蟬

松岡蒼兒

齋藤淡垣洞

森口たける

東信太郎

石川舟洋

岡田花野

田口英夫

入江孤燈人

小野寺大葉子

桐井靖夫

岡本流水

篠崎鳩坊

梁瀬喜佐代

○ 卍 禪 子 選

みたまかしこし夏深みゆく 照井稗人

徑に遠雷や散るのは笹の葉

月の壁にコスモスゆれてゐる

さびしくとんぼとらへてゐる

垣の思ひ出のそれもこれも花

春めく夜の影列車が擬装してとほる

いしぶみひざかりつりびとのとほり

おのおの嬪かれたる感情ひとつをもち汽車が鐵橋にかかり

一つ湯吞があり、とそんな句をつくられる目なさしで

妻がその朝の特配の豆などを御佛の前

一人は暗幕のつくりをすませて寝ようとする

家の増産のとうもろこしを刈る親子にして

夜涼しよ家の墓もののすけゐて秋となつた

妻に兜をかむらしこの冬月の生涯のけしき

清水が湧くそば安行に來て安行の石に座す

歸還の兵は海であらうか迎火へろく火

素足冷ゆるみのをかりてから秋茄子のこと

秋簾吊りてみしはや法師蟬をきくにつけ

わが事に掃く机のなき所在なき蟬が飛ぶ

佛具の類もそのままの寺舊盆の月まんまり

宇野豕鏡

伊藤秀雄

廣井晩花

夏雄孝一郎

ほほきき赤きと秋茄子染めしを戸くる
 薬も善ふうらなり南瓜の蕪しいてからの寺
 儼ら水筒がつきてある青梅の一つぶをさぐる

高橋 一

濱で隣りの庭の廣さをいふて籠の蟲音低くに思ふ
 物さげて戻れば隣りの庭草が見ゆる炎天
 旅の杉が高ければ木影の中地が見ゆる
 夜の蟲の一匹が長座のものもどりて嬉し
 波場々々一二の波場の泳き陣

園木六食子

女組にまじり遅しくお日和の麥を磨る
 方位風いでん玉蜀黍の強く反つた韓は立ち
 新麥質よく俵竝んだ供出日
 烈日その畑の唐黍紅いすずれ穂

加賀谷灰人

天の川眞夜の早池降雨はれてある
 七つ森をめぐり一つの森で啼いてゐた鳥
 一日を勤めて戻り月の夜の露次
 いたどりの赤い芽朝の雨のみち

森谷乙山

音を水がながれてある
 朝けふる竹の根ひるごりそのみどりの葉光る
 夏草の茂りてはあれどあぢさいのこゝろせんなく
 悲しみは樹蔭をいです夾竹桃おとろへず赤し
 大原女がえや／＼今日は弘法さんと花賣りに來た
 學生機をやうに赤とんぼ背も翼もかぢやき稻かほり出る
 みどり渡き大樺あるところ父の墓ある

佐藤鳴風子

鳩の群見えたり見えなかつたり五月の空の陽さんさん

沈丁花移植する満身の力花こぼれる
 ツボンぬいでゐたあたたかき食のけむり
 やはり五月人形ならべてやり山吹の雨がきんいる
 疎開の吾子があの山にゐる動く山の朝雲
 麻に馬がゐる疎開の吾子のほだし

奥田信一

疎開の吾子と別れて來て線路ぎわのすかんぼ
 草だんご燵く野の家の午どき
 鮪跡に戻つて來て昨日の夢が消えない
 春來る天地刈田刈田の光冷たや

奥田新次

大東京の遠いはづれに住み春の光亮ち來る
 疎開の子等雪をよるこぶ朝ばん雪の山々
 空の光も河原一すぢの道春來る
 馬耕の網さばきも乙女製材所の響

伊藤水穂

薯の花行囊れてくる道
 かほちやの蔓屋根へつゆの月
 一とこゝろ映え明る山のカナカナ
 子等いつさんに駆ける葱坊主

鈴木梅字ノ

芙蓉の芽ふく夕陽に雀ら來り
 海ちかくこの家のまひる煙らしてゐる
 雲の白い麥笛鳴らして兒の二たり二たり
 又隣では米をつき出した山吹
 今年の冷えの七月山を緑のあさき

關口比呂志

眼覺め寂ぶ夜鳥啼きうつり來てやみぬ
 朝風百とかぞふ聲々鯉子買ふと人差
 大輪あやめは陽の花辨もてあます姿
 庭から御本堂の本尊を拜し初秋の行つて來ます
 朝の水をやる南瓜の大きくなるそれを樂しむ兒
 水を引く茄子のなりその付いたことも
 頬白のこゝろがまるび入る回診です
 病室どの壺にも花の無い残暑で
 療養所しんかん糸瓜の花の落ちる
 朝倉あと抹茶いたたくしづこころ
 曲つたなりにコスモス空へのび咲き
 胡麻干す石盤石に赤蟻這ふ
 夏の初めの祖母の香残る衣にて
 雪残る谷あり鮎の背は青し
 けさは若葉うつ雨の雨音をきく
 人の逝き死のあわたし狭山霧がよどんで
 山際に雲が流れるけふきりの白い雲
 寮生活の赤い人形が置き忘れ
 畔幾筋も風荒きに雪消え果つ
 正しく立ち並び冬空へ煙突働いてゐる
 それぞれ芽生いて朝の山は濡れきつてゐる
 汗をふく額油に染みぬ騒音の中
 晝類齊きかきて夕日強く汗の目

河合英観

小川一灯

伴野龍

横山佐吉

萩原アツ

鎌倉白羊城

横山吹笛

夕べは歸る荷馬の引くは襪械の錆びて
 お前と共に供出の草刈る照る日に耐へて
 供出の刈草を背負ひ日あるに歸る
 七夕の宵は子供と七夕の話お星ぼし
 ふしぎに生きのびて友の柩をいくつも、秋風
 けふ秋の便りを手にし私にかうして生きて
 れむり草葉をたれてより海の色失ひゆく
 朝から土用浪でしまひの胡瓜をもぐ
 雨晴れ勤勞一日子の歸りくる頃
 人と約束を果せねこころ朝の徑草濡れ
 焼茄子の酢がさはやかな海のある宿
 ととせ見ぬ女の子があり郷にある郷の秋
 山の子は親しみやすし蓼の秋めく
 鰯雲働かんとする明日のありぬ
 霜朝の子らは葉を散らし陽あたりてゐる
 彼がペラのの花一輪はげふの事務室
 蜜蜂探蜜柑子花時局平日のこころもち
 寸燐の二尺ばかりを明かりよぎる火蛾
 白樺芽ぶかずに白く寒い五月
 まつすぐにのぼる煙高原の朝あけ
 雨ばれ茄子の黒さが光る
 勤勞日やけした帽子とつてゐる風
 山の夕きりで涼しい町

増田滴水

淡路呼潮

森抱葉

大槻實

峰松春風

大森古天

谷地誠志郷

南畝三坡

佐藤厚吉

鎌田一相

高橋長太郎

ちぎれ雲まつたく暖かになりてより

子供ら玻璃窓に^{クン}手投^テて止まず神父さんとほぐ 早川 昇

神父さんへお留守居たのむと言ふはありがたしたただありがたし

黄土の地膚あらはに草も無きをいたむ 高木 凡平

黄塵の中で若き日を過ごしたといふ女ゐて

すゞなりにトマトの紅しうあずきの一つ 廣田 葉蘭

明日は日曜四五年は會はぬ人の寫眞の前 古村 かの

君の死我ら芒の陰に群れ立つを 南部 一卿

牛が草にれて草食んでゐる山の煙り 古川 直右

天の川がななめ白くあの想ひ出 田代 濱女生

そのとき月出で黍の穂の揺れ合ひ 石下 谷乃不女

オモロうたはも島がくりともはだか沙ざい 今井 駄天

粟のはなどこかで匂つてゐる夜を歸る 細 越 榮

あわただし雲のお供へもない月 川口 三角洲

呻くがにさくる枝にかぜ絶えしよ 衣 浦 眞

○ 一 碧 樓 選

浮水ちりぢりに海はひろい海 三國屋 白省

雪解々々湖ありやうに見えて

そんな爐話の夜の屋根雪すべるがあり

牛の食ふ青い草まだ小さくてあり

牛によれば牛の體臭地に蓬の芽

日々卒伍のくらし青紫蘇の苗を地に置く 龍田 眞魚

犬の子が立ち大根畑の夏大根

春日いま暮れる少年鐵くたを持ちて立てり

布の袋を持ち布の袋の大いさ夫人春畫通る

麥畑と茶畑と雀一羽にある道のり

學徒けふも機械とゐてはや麥の穂

炭焼きやめてけふ種播きの日あたる水

若葉いろくあり病室の陽をさへぎり

日暮れる厨おほき包の邊のにはふ

病後の裾ぬらす朝の野躑しげり

國に應ふなとめら羽後の國この國春畫

船をばつきりかんじあるいておぼる埋立地

春霜の窓在りけふの仕事たのしみおもふ

辛夷まづ咲く水槽に水張つて置く

春農海じつとあり茶種畑はひく

筍を持ち降り降る雨に濡れたり

人があるくとき苗代の水苗代

きせるをうっ軽く打つ黍の穂を感じ

子供を群馬へやりじやがいも今頃

庭に梅がなつたその青い梅の實廊下の椅子

土管ががらんど草にころがり雨明り

池の浮葉に日が照り祠の中の神體

龍田 眞魚

松原 颯々

相澤 華芳

山崎 多加士

吉澤 稻市

土間で夏の人の煙草吸ふじやが暮ころがる
 しばしをろがみてをろがみたらず蟬時雨する
 あたり黍も穂となり風吹くべし
 四十雀けさも篠懸に來て土用吹く風
 罹災者の竈火の見えてゐる藪の方に
 枯草の地をふんばつて立つひとりかんばせ
 飯盒炊爨のかとりをまともうけるその童顔
 躑心菊の花黄なるがゆゑに冷ゆるがゆゑに
 冬の日石に腰をおろすを叱るまじきもち
 冬木の中をぐる人あり夕日を透して見る
 雪むろに居る兒らに雪明りとなる月があり
 春雪踏んで來葉沓少ししめり
 瀬音する橋も見えて凡て花
 濤を抱く山に草を口にし
 田圃からの水流れ御國の草青い草
 薊の花盆地の田圃のうすむらさきの花
 山鳥の巢ある方の新芽の楡の木
 日毎飯を食ふに戸口に草を敷きて
 柳の木茂り街角を過ぎゆく工員工女
 トマトを御佛壇に供へ夏朝家の者
 家々のあかり點いてゐる家々の所在夏の夜
 兵が若い顔で敬禮して出ていつた皿の草餅
 隊長が春の日の蓋眼鳩舎の鳩ククと鳴く

武藤牧の秋

富岡のぼる

黒丸古生

齋藤冬三

大倉親英

打田金牛

兵が馬を洗ふ柳が濡れてゐる水嵩
 雨がふる若葉でアカシヤ花満ちし
 工員の顔が春日にくらに機械を組める
 屋根が雪から出た町空青い
 あちこち雀あたりする雪どけ原の人
 窟深いところ目洩れあればこの虎杖
 めだか一群二群あり少年まともに夕日に坐し
 白もくれんの下を通り山から下りて來た少女ら
 あせびの花をとりに山は山に重なり
 馬酔花の花を手折るに山に少女こゑする
 胡麻まかんとふをみな兒ら二人のをみな
 とねりこの太芽うごくらしい遅し枝の張り
 露の蘆がまるい落葉しつかり地につき
 山越の東風となる雪の山脈が黒々
 皇土日のてる家前麥のほこ立ち
 夏朝潮の流れをうしるに整列して船舶兵
 新佛さまむし暑い隣組の人も疊にすわる
 住みなればべの垣のばへ若葉になりつ
 今や男ゆくことにまよはず淺春
 堪へてをりけふ淺春の空をゆく雲
 母とし生くる母の妻沈丁につぼみあり
 早春小鳥のこゑさく朝の時あり
 今日梅へ鳥が來る職場に手を見たる

藤田三六亭

新田巢州

佐藤豁山人

山本光主

後藤零丁子

口田村也

絨獸地は水吸ひつくし春の深み
疎開の人に昔句ふわが井戸を持ち
雨の青岩へ流るゝ波に春に

宮本夕漁子

ひとゆく馬がゆく道への草の青い
春の山へ入るそのなとこあゆみはやく
家びと竹の秋を知つてゐる島にいでて

金子曙山

舟べりに立つ子らそれとなく春の落べ
苗代の水を見るずつと朝かすみする山なみ
空に陽あり雪解田のみづに人立ち
残雪を露の蓋いでこのやう國土のわれら
雪割した後ろのみち子らが連れたち

井上星樹

空を白鳥渡り島の山が雪照り
大雪の名残り一塊の雪をくだく家裏
草萌え日に向ふ牛の眼や
母すこやかに在す草青みたる家へ
少女霜やけす爐に焚く少し生木

三雲城東

餘寒君としはし沈黙す爐への火埃
日永くなる石にふれる葉蘭の葉
早春舟洗へば打ちあふて渚の波
片陰よきりゆく並木廣葉の茂り

伴野龍

夏の夜の月のぼつたばかり街のほてり
アカシヤ木のぼりあそべる跣足の子
向日葵咲き空へ對けて咲き畑青く

佐藤禾黄

家からたれも出て来ない軒へ雪の山せまり
雪の日女人ら布きれをあつめる度しく
榛の木の花ちりほくらこのへんの人たち
そんなに前垂れにつみつくしひといふ

菅、木葉

枇杷の實熟れた木の蔭で待遊擧
梅雨朝伐られて一木樞の木なり
庭木に近く青田が見える家前

牧野秋風嶺

淡雪ふるあかりの部屋にゐて古陶器
芽柳の家にて魚を焼いてゐる人
藪のなかに小川の岸にたそがれて残の雪
老醫師として決意あり土筆の袴取つてゐる

大川しげる

芹を摘んで来たに久々遠くより手紙来てゐる
山に光あり鹽の味ある草餅をいたゞく
子供ふりかけ粉かけてたべる少し遅い朝飯
雪ふる夜の汽車をおりる男に重いトランク

永井はるを

あゆめば野に三味線草の白くも
早春月のない鹿から馬の音する
談笑兵らに黒い馬もをりて淺春
春雪窓あれば音なくきたこの人

本間昇

身をよせ銃口擬すその枝芽枝
兵四五人ゐて春の塵囂くけむり
兵一團去り雪解川水音す夜の暮合
一叢の椿をかんじ人のうしるを歩み

高橋安榮

鰯を捕る根から畔から歩き
 筈の皮をむくたげのこ濡れてある
 縁から見える紫陽花の警報解除となる
 なれて掌の中で鳴く雀の子を子供
 警報を聞いて起きるれずみちの花の匂ふ
 雪窗に見下ろし爐の妻子のすがた
 子の飯に春練箸にて頒ち子を見る
 雪に押されるてきんなんの枝に芽がある
 冬の日礫洗み白浪のかたちよき大和島根
 たゞ膝がしら冷ゆ徳うすきひとり
 子をもうけかくて歳月あり泣てきびし大陸
 残雪の山を越えてくるちぎれ雲白雲
 透春風がふく野にうごく人一人
 桑若葉が光り山が真近に迫り
 薪と鹽の配給あり五月みちをゆく
 田水見廻り鏡毒白濁るこれの水口
 旅抱へ陸稻の草出しするばたみちにあぜに
 母とあり林橋もちて一つを食ひをり
 土のいる草のいるにて三月暮れてしまふ
 ちよと母とはたらき白し梨花
 佛桑華の若芽食ふよほど小さい山羊
 この道の片側につゞき垣根の蔓草
 二つ三つ青い實あり菟麻塀の高さに

伊東秋蘿

工藤抱擁子

瓜生敏一

平井青三

下平疎開子

佐藤西呂

石下白想

藪かげ一本はだんきやうの白い花
 畑すみ菜の花も咲きそこは馬鈴薯畑
 ひとり行くふんどうのみのゆれるこの道
 麥青々として兵舎入口明かにゆふべ
 蝶とんで縁先に干してあるものゝ中白布あり
 春淺く山裾の水車廻りなる朝をゆく
 山の辛夷花咲いて母もこの道を通勤す
 蟬鳴くふたつのこゑそらはす麥畑の匂ひ
 船は今夜荷役の月が出てある岬のはな
 水温みたる川へ來ても洗ふ一人の童女
 坂道のぼり木の芽ひかる廣い平地なり
 うらゝか階下にて話すこどもばかりのこゑ
 大木を伐り夏となる家そとの道々
 げんげ田夕ぐれてくる校門とざされしまゝ
 雲雀鳴く日を日を鍛はなさず老いて
 池に薄氷はつて枯れ葉二三枚落ちて
 あられふるに病む職友と黙つてある私と
 彼岸櫻の寺庭をぬけて出勤すこの朝
 春雨降りやまず小舟をつなきたる木の下
 水槽の水きれいにて人覗いてゆく春日
 學徒一群うごく淡雪まだ残りあり
 菜の花咲いて工員にあかるき窓々

二宮香芽子

太田 鏡

和泉 鷲人

佐藤かめ雄

高藤 芹村

石井多津巳

河田 幸三

延江 佳風

蓮屋 枯苑

徳光 梧郎

岡部 秋嶽

影山阿修羅

島田啓生
逸見孤舟

編輯後記

○本誌の刊行は目下順調であるが、ここのうぶなばなが、眞檢な日目の状態にある。これは經營に關しての事ではない。それにして、編輯が比較的閃めきのないやうな感と興へてゐるが、これに就いては編輯子に申譯ない次第である。是非共新人の活躍を願はなければならぬ所だと思ふ。新人、尤も新人と云つても、青年にして既に時代遅れの考へを持つてゐる者もある。要は本誌の使命を自覺し、已れに生きる作家によりて前途を切り開いてもらう以外に方法はないのである。

達成に御協力願ひたいことを申上げておく。

○本誌の目的は色々ある。が今日では何んか云つても自由律非壇の一元化された現實を認めればならぬ。編輯子は創刊以來全力をかたむけてこの大問題に對處して來た。今後は讀者或は作家の聲をきく必要があると思ふ。ただし俳句日本は層雲、海紅、陸、と云ふ各々の地盤に立つて適合ひをやる機關ではないし、又、まつたくの社交的機關でもない事は確と腹に入れて置いて頂きたい。さすれば、今後情勢の變化により如何なる苦難にぶつからうとも、新人の漲きり迷る情熱は、必ず歴史を作る上の原動力となり、青年こそ時代を劃する役割を持つことであらう。既に基礎は作られた。俳句日本は絶對我らの手に依つて消去せしめてはならない。新俳句壇唯一の雜誌、新日本俳句の爲に——起て。青年の無氣力は戦後の復興をおくらすものである事は俳壇に於いても明記す可きである。

投稿略記

○俳論、隨筆等。(なるべく簡潔なるもの)
○俳句日本作品(俳句日本社々選)句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。
○選句録作品
○荻原井泉水選のもの 神奈川縣大船町建長寺前荻原井泉水へ
○中塚一碧樓選のもの 世田谷區上馬町三ノ一〇五
○中塚一碧樓へ西垣卍禪子選のものは足立區伊興町狭間八八七西垣卍禪子へ句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。
○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿、選者に限る事。
一、締切 毎月十五日
一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各社の發行所宛に小爲着にて願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

本誌定價

一册分 金八十錢(送料別)
六册分 金四圓八十錢(送料別)
十二册分 金九圓六十錢(同)
○前金(なるべく小爲着)で御拂込下さい。
○必ず何月號よりと御指定の事。
○御轉居の際には發送部宛御報下さい。
第一卷 第十二號
昭和二十年九月廿五日印刷納本
昭和二十年十月一日發行

發行所 東京都足立區伊興町狭間八八七 俳句日本社
配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九